

# 經濟論叢

第七十九卷 第三號

---

故 谷口吉彦博士、故 松岡孝兒博士遺影ならびに署名

觀光税の問題点……………	神 戸 正 雄	1
米国外投資の成熟と停滞……………	岡 田 賢 一	14
財政学と国家認識……………	斎 藤 博	37
故 谷口吉彦博士略歴・主要著書論文目録……………		55
追憶文（石川興二・松井 清・河野健二）		
故 松岡孝兒博士略歴・主要著書論文目録……………		69
追憶文（中川与之助・中谷 実・酒井一夫）		

---

昭和三十三年三月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## 追憶文

## 谷口吉彦兄と当時の学部

石川 興 二

あの元氣だった谷口さんが高松で亡くなられ、それを案じていた松岡さんが二日後に京大病院で亡くなられた。共に元同僚で私より一つ年上と年下の両君が、こうして急に亡くなられたとき、私は人間の命のはかなさをつくづく感じた。

谷口さんは大正十一年の卒業で、私は丁度その年の三月に留学したので、相知る機会がなかった。大正十四年に帰朝した私は、河上肇先生に紹介されてはじめて谷口さんと知った。その時、先生は、谷口さんは友人などにも親切なよい人だから親しく交る様にと云われた。

谷口さんは、その生い立ちを人々より聞かされたところによれば、実に苦学力行の士であり典型的な立志伝中の人物である。こうした人にはとかく固陋な面があるものだが、谷口さんはそれと異って、進歩的な経済学を研究し当時若かった私達と一緒に学部改新という理想主義的な仕事にも尽力された。こうした谷口さんの性格を、私はその生い立ちとの関係から考えて特に優れたものと思うものであるが、当時の学部には谷口

さん並に我々を育てたところの特殊の自由な研究的雰囲気があった。それは我々を作ったのみならず、我々を通じて更に今日の経済学部の形成にも影響しているものであると思う。谷口さんを深く理解するにも、先づこの雰囲気を理解しておく必要があると考えるので、私もその中に育てられた一人として自分の体験からそれについて述べて見よう。

河上肇先生の研究室は赤煉瓦の建物の西側にあった。当時『資本論』を熱心に研究して居られた先生は、毎日先生の室で谷口さんと昼食を共にされながら『資本論』の話をされたとのことである。こうしたことが谷口さんの研究の上にも大いに役立ったであろうが、更にこの先生の感化が若い谷口さんの精神を育てたことと思う。このことは私共若いもの一同にとっても同様であった。堀川(虎三)さん、森(新一郎)さんの室もこの建物にあって、私達は当時皆先生を中心としてマルクス研究をしていたので、誰かの室で顔を合せると、たちまち活潑な議論が始まった。先生もあくまで一研究者としてそれに加わられた。こうして度々方々でおくる元氣な大きな声を聞いて、他の人々は何事かといふことがあつた。その頃の全く自由な研究的雰囲気は実に楽しいものであつた。当時帰朝した三木清さんをも誘うて、河上先生等とマルクスを根本的に研究する『経済学批判会』なるものを作つた。西田幾多郎先生に御願ひして所謂「唯物史観の公式」を批判して頂いた席で西田先生が、言語が

唯物史観で説明できるかと河上先生に問い詰められたこともあった。(この西田先生の出された問題の深い意味は、近年になつてスタレーンの『言語学の諸問題』が世に出て、言語なるものは生産力と生産関係との弁証法的発展を超えたものであることが説かれて、我々にもはじめて明らかとなつた)当時法学部の教授であつた佐々木惣一先生、瀧川幸辰さん、恒藤(恭)さん、末川(博)さん、牧(健二)さん、等も参加していたが佐々木先生と作田莊一先生とが自由主義について論争されたこともあつた。

マルクスを根本的に理解するにはヘーゲルの論理学を理解しなければならぬと云うので、木村素衛さんに来てもらつて『小論理学』を研究することもあつた。こうして我々は河上先生を中心にマルクスを研究したが、それはあくまで批判的であつた。

ある時、先生は私に学生と一緒にマルクス研究会を作らうと云われ、私は先生が唯物史観をも批判的に研究されるのであれば致しませうと答えた。先生はそうすると云われたので、私は演習の学生をつれて参加することにした。学生集会所で最初の会合をした時、先生が会を始める挨拶をされたが、それは唯物史観を前提とするものであつた。私は立ち上つて、それでは約束が違うと演習の学生をつれて帰つてしまつた。真理の前に師弟の別はないと考へていた私は、平気でそんなことをしたのである。先生はあくまで学問的良心的であられたから、一時は感情を害されたかも知れぬが、また一緒に研究をつづけた。或時

は先生と共に河村多美二さんの生物の教室を訪れ、再生現象について有益な教を受けたこともあつた。先生は経済学部の構成についても、マルクス主義だけでなく経済学の諸学派が講義され競合すべきものであると考へて居られた。

こうした鬱屈気の中で我々若いもの内には、自ら自由な総合大学的な根本的な研究精神が培われて行つたのである。先生が突然京大を去られることになつた後の沈滞した学部は、私達にとっては陰鬱な耐え難いものであつた。然しこうして生い立つて来た精神は、若い者達のものとなつて持ち続けられた。

昭和三年七月谷口さんが、その中に八木(孝之助)さん、蟻川さんも帰朝した。こうして四人が一緒になるとその間に自ら改新の気分が強まつて来た。やがて学部内の活動に進出し『經濟論叢』の編集にも当ることになつた。昭和十四年の初め私が学部長となつた時、私達は、学部の講座が殆んど西洋経済学であつたから、「世界を知り世界に於て日本並に東亞を確立する」ための講座を増設せんとした。更に一切の情実を排して広く人材を求めべきであると考え、靜田、穂積、徳永の諸氏を外より迎へんとした。また人文科学の諸学部の教官が相密つて総合研究をなし得る人文科学研究所の設置に努力した。そしていづれも実現した。私の学部長在任は僅か一ケ年であつたが、その間に比較的多くの仕事を為し得たのは、全く谷口、八木、蟻川三君が心から学部の為を思つて協力してくれたからである。

## 故谷口博士追憶文

私はそのことを今も深く感謝している。この我々の協同一致の根底にあったものは、河上先生を中心として作られた自由な批判的な総合大学的な研究精神であった。私の次には、谷口さんが学部長になって同じ方向に学部を進展せしめた。

終戦後二人共進駐軍により直接追放になったが、私の追放理由が学部長として東亜経済学講座を新設し、人文科学研究所設置に努力したことをもって「大東亜戦の基礎づけをした」とする牽引附会なものであったから谷口さんのも同様に無実ものであろうと思う。私は初めには、当時の鳥養総長、木村、高島等私の研究を思うて下さる人々により、その後には、疏開先より医業にかえった兄の永きに亘る援助により、解除に至るまで書齋にあって研究に没頭することが出来たが、谷口さんは実社会に立って貿易会社をおこし日頃の学問的研究である貿易論を実践した。かく谷口さんは実社会的にも有能な人であった。

一面情に厚い谷口さんは、退官後の河上先生に対しても最後まで親切にされた。東京中野の先生の御宅には、谷口さんが贈られた厚い基盤があった。谷口さんは先生の暮のお相手もしたようである。私はこうした方面にも無能であった。

昨年一月三十日河上先生の歌碑並に墓碑の竣工式を法然院で行った時、私共二人も相会したが、それが我々の最後の面会となった。思えばこうして不思議なことに、私共二人は初めから終りまで河上先生に媒介されたのであった。(二月五日)